

大学生活を通じた文化資本の蓄積効果

—上越教育大学と関西私立大学・短大における追跡調査の結果から—

大前 敦巳（上越教育大学）

1. 問題意識と調査概要

高等教育の大衆化が浸透し、学歴エリートの権威が失われ学歴インフレによる価値下落が言われて久しい中、その質保証をめぐる危機状況が常態化している。「大学・大卒」という指標の名目上の同一性に信頼を置けない今日、非大学進学に対していかなる「卓越化」を図ることで、その延命が維持されるのか。それが将来の職業形成にどのような効果を及ぼすことにつながるのか。

大学・短大進学率が約半数までに推移するなら、非進学との社会的距離は接続しているのが通常であり、そこには学力以外に経済合理的選択を促す諸条件の介在が指摘される（矢野・濱中, 2006）。他方、大学進学は長期の学習機会が得られる点で、専門知識や文化経験を身につける貴重な時期を提供することは昔も今も変わらない。本報告では、文化資本の蓄積効果という観点から、現代の大学生活を通じて培われるものが、どのような社会的意味を有するか提示することを目的とする。

本報告で用いるデータは、地方国立の上越教育大学と関西の私立大学・短大の学生を対象に実施したパネル追跡調査に基づくもので、学生生活を通じて学問、文化、スポーツなど文化習得を遂げていく側面に着目し、それが将来に向けた行動や態度に及ぼす効果を問題に取り上げる。特に、上越教育大学で1年次（2003年）から4年次（2006年）まで毎年10月下旬～12月上旬に継続実施した調査結果から、4年間の大学生活を通じた変化の過程を分析する。関西私立大学・短大については、1・2年次（2003～04年）の結果を比較のため

の参照対象に取り上げる。サンプル構成は表1の通りである。

2. 4年次までの学生生活の変容

これら3大学・短大に共通してみられる年次変化をまずは確認しておきたい。学生生活の充実度は全般的に高く、上級学年になるほど、講義に対する実習やゼミの比重が高まり、教員と話をする頻度が増え、教職員の助言や相談への満足度も上がる。他方、授業に力を入れる程度がやや低下し、授業をさぼる程度も増える。

なかでも顕著な変化は、就職活動や採用試験に対する意識の高まりである。自分の専門分野のほか、進路や就職についての情報を多く調べるようになり、日常生活から距離をとった表現や創作への関心が低下し、上下関係や協調性など現実の社会秩序を重んじる傾向も強まる。

私生活においては、大部分の学生が友人関係を大切にし、自分の生きたい人生を送ることが重要と考えている。同じく大多数がアルバイトを行い、映画やポピュラー音楽を愛好し、消費文化に接する傾向が顕著である。学年が上がるほど自動車を用いて様々な場所に出かけ行動範囲を広げていく。

このように大学教育を通じて専門的・一般的な知識・技能を習得していくとともに、現実の就職や試験に意識を強く傾けながら、消費文化と連続性をもつ楽しみを享受する、academic, vocational, fun を都合要領よく折衷した順応主義的な学生生活を送る傾向がみられる。

表1 「大学・短大生の生活と文化についての調査(2003～2006年)」サンプル構成一覧

大学名	1年次在籍者数	2003年(1年次)回答数	2004年(2年次)回答数	2005年(3年次)回答数	2006年(4年次)回答数
上越教育大学	168	106	139	145	119
関西私立大学	325	202	109	(60)	—
関西私立短大	179	166	159	—	—

3. 職業形成に応じた文化習得

表2は、上越教育大学2年次以降、前年に比べて知識や能力が増減した程度を示したものである。専門知識、図書館活用能力、一般教養は増えたと答えた者が多く、これらは互いに0.5以上の相関関係がある。逆に、外国語能力の平均値は負の値となって減ったと答える傾向がある。外国語能力は、異なった人々や文化の知識と正の相関をもつが(0.41)、チームの一員として働く能力(-0.11)、他の人々と協調する能力(-0.11)とは負の弱い相関がみられる。

表2 知識や能力の増減(上越教大2~4年次)

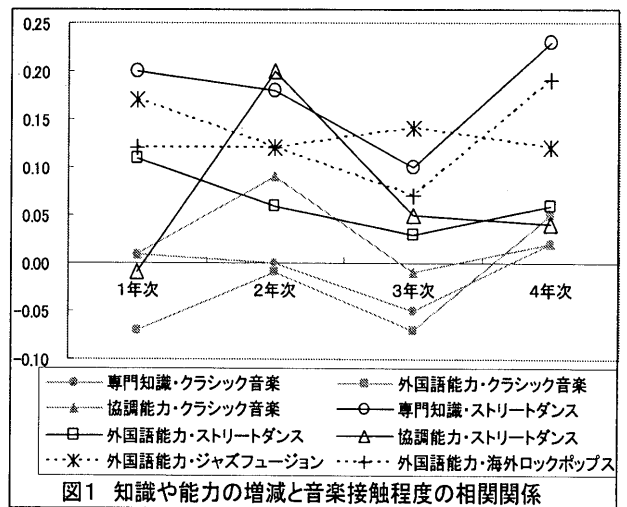
項目	平均値	標準偏差
専攻や専門分野に関する知識	2.46	1.51
図書館を活用する能力	1.97	1.68
一般的教養の知識	1.62	1.27
チームの一員として働く能力	1.57	1.52
他の人々と協調する能力	1.51	1.64
問題を分析・解決する能力	1.33	1.29
批判的に考える能力	1.27	1.41
リーダーシップを発揮する能力	1.23	1.53
異なった人々や文化の知識	0.49	1.44
外国語能力	-0.63	1.76

注)とても増えた2点、少し増えた1点、変わらない0点、少し減った-1点、とても減った-2点とした3年間の合計点(-6から6まで分布する)。各年度の脱落ケースは0を割り当てている。

専門知識や一般教養の増加は、大学の授業に力を入れることに結びつき、上級学年になるほど充実した生活を送る傾向を伴う。それはおそらく教員の職につく意識を高めていくからであろう。外国語能力の増加は、男性に高く、学生生活充実度とはほぼ独立で、個人的な余暇活動に結びつく。協調能力の増加は、女性に高く、全学年を通じて高い生活充実度を伴い、特にクラブ・サークル等の集団的活動の参加と関係がみられる。

4年次の進路選択および大学生活評価との関わりをみると、外国語能力の増加は、大学院進学準備をした者、一般教養を身につけるのに役立ったと答えた者にやや高い。協調能力の増加は、教員採用試験を受けた者、教員になる知識・技能および特にコミュニケーション能力を身につけるのに役立ったと答えた者に高い。

図1は、専門知識、外国語能力、協調能力の増減と、1~4年次の文化活動のうち音楽接触程度との相関関係を示したものである。クラシック音楽は学内クラブを通じて行われる傾向が強く、知識や能力の増減との相関は0に近い。学年が上がるほど盛んになる流行性の強いストリートダンスは、専門知識の増加と正の相関があり、順応主義的な特徴が現れている。2年次には協調能力との相関もみられる。外国語能力の増加は、ジャズや海外ポピュラーなどの「中間趣味」と結びつきをもっている。



以上は地方教員養成大学の一事例であるが、いずれも文化資本の観点からすれば、「必要性への距離」を前提するよりも、職業形成に向けた予期的社会化に応じて獲得され、その効果を生み出している側面が大きいと考えられる。

より詳細な分析結果、特に社会的属性との関わり、2年次までの関西私立大学・短大との比較については当日配付資料で報告したい。

4. 多元的な蓄積効果とその矛盾

大学生活を通じ個々の職業形成に順応する形で文化資本が蓄積されるとすれば、その様態や効果のあり方は、社会経済状況によって多元的かつ変動的でありうる。外国語や協調性に対する意味・価値付与は、その例証となろう。

他方、文化資本を蓄積しその効果を発揮するには長期の時間を要するため、多元的・変動的な状況に対しリスクと矛盾を抱えることになる。順応主義はたえず順応し続けなければならないという問題点を省みる必要がある。